

Title	福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』翻刻
Sub Title	
Author	中島, 正二(Nakashima, Shoji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1994
Jtitle	三田國文 No.21 (1994. 12) ,p.18- 31
JaLC DOI	10.14991/002.19941200-0018
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19941200-0018">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19941200-0018</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』翻刻

中島 正二

福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』に関して、「福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』について」(『汲古』第二六号 一九九四年十一月)において、書誌的な報告と若干の考察を述べた。詳細は、それを参照願いたい。そこで述べたごとく、福井市立図書館蔵本は、伝本中最古の写本であり、内閣文庫本や群書類従本の脱落部分を補訂でき、また、内閣文庫本と群書類従本の奥書にその名が見える「柳原資定」の筆とする極札が貼付されており、本文の上でも諸伝本間の関係を考える上でも、非常に重要なものだと思う。そこで、全文を翻刻することにした。

御所蔵本の閲覧ならびに調査の御高配を賜った福井市立図書館関係者各位に、厚く御礼申し上げます。

\*

\*

書誌

函架番号、別一―一・五―三九一。(室町末期)写。袋綴一冊。

紺地木槌等模様金繡裂表紙、竪二三・二糎、横一六・八糎。料紙、楮紙。外題、中央・白地金泥花模様題簽「十二番哥合」。見返し、金切箔金泥山家模様。墨付、三六丁。前半葉、一〇行。字面高さ、約一九・七糎。遊紙、前後各二丁。前遊紙表に「柳原殿資定卿 十二番」の極札貼付。奥書はなし。なお、「越國／文庫」の朱の印記があり、旧藩主松平家寄贈図書であることが知られる。

\*

\*

翻刻にさいして、読解の便宜のため、私に句読点を付した。漢字はおおむね通行字体に従ったが、「哥」はそのままにした。底本では、和歌は二字下げで、終わりはそのまま本文につなげて書かれており、そのおもかげを伝えようと思ひ、それに従った。不審な箇所には「ママ」と傍記した。

\*

\*

ちかきみよのおほむことにもや、二月十日あまり、南殿の花さかりに、ふくかせもおりをしえたるのとけさなるへし。君もうつりきこえたまへは、大きいの宮をはしめ奉て、女御、更衣おはしますかきりは、さふらひ給はぬも侍らす。かく人などめしいて、みち／＼にたれるは、みなえりすくらせ給へは、いと竹のこゑは雲井をひ、かし、まひ人なども、きよらをつくさせ給。袖さしかさせるすかたともは、紅葉のかけには侍らねと、けふはあはれともたれかは見侍るらんと、の給て、君うちゑませ給へは(1才)、女房のかきりはこたへまうき御けはひなるにこそ。御かはらけまいりて、花有喜色なりなといへる題、ひたふるにつかうまつる。からのやまとの打ませて、日ねもす、なかめくらし給。あすもと契りけむときか花ならても、月はけにやとりかほなりけり。大宮より大納言君といへる女房めし出て、あすもかく御覧せんなるへければ、めつらかなる御あそひの、こひねかはるゝあまりに、ふるき物かたりにあらはれ侍る女を、つかひさためて、つかさ、位をいはゝ、なにのあらそひかは侍らん、たゝしな心の時によれらんふし(1ウ)ふしにつけて、しゆうを奏し給へとて、御硯めして、左伊勢物語、右は光源氏に侍る人々を十二つかひにさため、御心にうかふにまかせて、みつからあそはしてたふ。大納言君給て、物をあはするためしはおほかるることながら、あるは絵、あるは哥、にほひ、あふきなど、折にふれ、ことによそへて、かちまけはあはなむかし。とをき昔の人を、いかさまにか引くらへをしはかれ侍なむと、をろかなる心のやみはかゝるみちにもふかゝりけり。かしこきおほせことの帰るためしのであらまほしうとて、

かたはし／＼いひさため(2才)侍らは、ふりにし玉のみかゝぬかたのうらみは、いと空おそろしからすといふことなし。

一番

左 五条大后宮 勝

右 桐壺更衣

左は文徳天皇の大后宮にて、君のかしこうおはしますにしたかひて、世をなて民をめぐみ給ふこともあさからす、君をしもいさめ奉り給のみ也。しうの文王の后ごひは、其み世をたもちたまはむことをねかひて、世をやすんすることは人をうるにあり(2ウ)人をうることはえむにしかしとて、ゆへある臣下のむすめことにこひとりて、御門に奉られけると也。かゝるためしまでひきおほさるゝにや、み心たて、御すかたのやむことなきゝはにつけても、いひなすらへかたし。世継の物かたりなどにも、この君をは花にたとへ奉るにこそ。ちゝの君の老をさへのはへ給はかりも、あらぬ名をしもとりそへ給。この御腹に王子生れさせ給て、ひとさふくらるにつかせ給、いとめてたし。右はきりつほの更衣、ちゝは大納言などにてうせしにや、たつきなうなり行まゝに(3才)御宮仕にうちへまいられ侍しを、みかと、ときめかせ給て、とし月はこなたにて明し暮し給。かたへの人、みなそねみおもひ給へらぬも侍らす。人のくにゝも、ことのおこりにこそ、世もみたれあしかりけれと、やうやう、あめかしたのもてなやみくさとなり給。ほとなう王子うみ奉り給。この御子、ひるこの御よはひのほとにや、御はゝの更衣なやみ給ことありき。をこたりもやり給はて、夏の比はいとしもをもうわつらはせ給へは、御さにとまかてなむとし給。御門こ

との外になげきしつませ給て、かねくは後の位をたに(3ウ)もおほしめしなから、世のそしりもかと、うちすくひこしをなどの給て、手くるまのせんしかうふらせたまふ。更衣、

かきりとてわかるゝ道のかなしきにかまほしきはいのち成けり、かくてつゐにかくれ給。うちには、ひたすらの御なげき、玉の行ゑのしらまほしう、まほろしゆかしきみ心成けりとそ。若宮、御ふくのまは、御うはのあま君くし奉て、野分にあれたる草の庵は、ならひにこえて露けき秋なるへし。内には此宮の御うへさおほしくわへ(4才)奉り給ひて、命婦の君してあま君のもとにたまはせける。

みやきのゝ露ふきむすふかせのをとにこはきかもとをおもひこそやれ、御返し、

あらし風ふせきしかけのかれしよりこ萩かうへそしつ心なき、御ふくはてぬるまゝにまいり給て、弘徽殿の宮の御やしなひのやうにておひ立給。七さいの春、ふみの道に入そめ給。こまより、さう人まいれしに、鴻廬官にてあはせ奉り給て、行末かけての御さかへまで、うらなひさため、御かたち(4ウ)ひかるさまにおはすめれはとて、光君となつて奉り、かのせいわうのためしをうけ給て、十二にてうゐかうふりして、みなもとの姓をたまはり給。冷泉院の御宇に、大上天皇の位給て、六条院と申けるにや。かくやむことなう、さえ、とくに付ても、天下をおとろかし給ふ君の母にて、所せうおもひ給へ侍れとも、そのみ世にも、こゝらねたみおほされし更衣なれば、けふの御あそひにえらはれ侍る判者にて、かしこき宮のみかけを、いかてかあふきたてまつり侍らさるへき(5才)

## 二番

左 二条后宮 持

右 薄雲女院

右、此女院は、きりつほの更衣かくれ給て後は、朝夕の空をたにわきまへかたう、ひたすらにおほしほれ給て、御枕をとらせ給ても、たれとともにかと打なげかせ給て、あさまつりことはたゆみ行のみなれば、みよもあきらかならしなと、歎きさはき侍て、いかにしてもかなと、この君をもとめ奉り。○折ふしはなくさめ聞え給かち成にけり。十に四五あまり(5ウ)給ほとどの御よはひにて、御かたちも、をのつからかゝやくやうにおはしければにや、かゝやくひの宮と申けるとか。藤つほにすませ奉り給てやうく昔にかよふ御さまなりけり。ひかる君も、まことの御おやめきて、朝ゆふなれつかうまつり給。かたみにいはけなき御心に、あそひかたきに物し給て、あふけなうおもひかはし給。としへても君はえしらせ給はて、御子なとうみ奉り給をは、とりわきてかなしうし給けり。おとなひ給にしたかひて、源氏の君にいとようかよひおはしませは、世人も心しれる(6才)とちは、かたはらいたきことにおもひ奉らぬも侍らす。母君も、かくうたて侍るすちなれば、それがあらぬかにいひたとらるゝしもこそ、すこしはつみあさかるへきわさなめるを、かうまでひたみちにうつし給へるあさましさと、打なけきて、源氏の君、

よそへつゝみるに心はなくさまで露けさそふるなてしこの花、此君、ほとなふ位におはしましては、源氏の君そ、世中の道はとりはからひ給し。けに母かたからこそ、みかとの御子も

きは、おはすめれなとおもひしりぬ」(6ウ)左の宮は、いとおさなふおはしましけるより、春宮へまいり給へきにて、いつき奉るに、中将成けるおとこ、わりなうおもひかけ奉りて、とかくいひわたりければ、御おやはらかなとも、ふかうせいしければ、世中をおもひうんして、人のくに、かくれぬ。さりても、よるはさすかにかよひなから、いたつらなりけるにや、いたつらに行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ、なとそ、うたひける。かくてもせむかたなければにや、忘るゝことをたにとうちねかひて、佛かみにも祈つゝはらへさまく〇侍しかと」(7オ)ありしよりけに戀しければ、

戀せしとみたらし河にせしみそき神やうけすもなりにけるかな、うちにおはしましては、君の御おほえあさからぬ御なからひにて、御いとこのみやなども、ひたみちにかしつき奉り給へは、なを世の光はみえそひ給にや、貞觀の末に皇子うみ給て、又のとしのほとにや、皇宮にたち給。此つかひは、いつれもやむことなきすぢなから、いさゝかのくまもましらひ給うへ、そのしなくもおなし風情に待めれば、よき持にておはしましなむかし」(7ウ)

三番

左 有常女君

右 紫上 勝

左、中将の父の親王、紀有常か家など遠からぬ程なれば、おとこも女も、いはけなきまゝに、うちいさなひなとしてあそひけるか、春秋の花もみちにつけても、色ふかきさまに行すゑかけてちきりかはしけるに、もろともにおとなしうなりてのよは、

女のおや、いにしさまにもゆるう心とも侍らぬを、はなむ心あるさまにけしきはむおりくもありける」(8オ)にや、さてよめる、

みよしのゝたのもの雁もひたふるにきみかかたにそよるとなくなる、おとこ、よろこひて、かへし、

わかためによるとなくなるみよしのゝたのもの雁をいつかわすれん、いかなる〇折にか、女、

あま雲のよそにも人のなり行かざすかにめにはみゆる物から、<sup>二</sup>おとこ、返し、

あま雲のよそにのみしてふることはわかるる山の風はやみなり、と侍るは又おとこある人とかけり」(8ウ)かゝればにや、人のくに、人もとめてまかりかよひけるに、女も、はたおなし心にてたちやりなとすめれば、おとこ、いふかしうおもひけるか、又いぬるかほして物のくまに、すみ見ければ、いとうようけさうして、夜ふくるまでことかきならし、うらみくひてぬとて、

風ふけは奥つしらなみたつた山よはにや君かひとりこゆらん、此君そ、おとこのいまはの時にも、さき立てこそやみちのひかりにもと、打たのまれ侍るに、すてはて給てんやと、歎ければ、おとこ、

しるやさはわれにちきれる世の人のくらきに」(9オ)ゆかぬたよりありとは、さもゆへありかほなりや。右、此上は御母には、いとはやうをくれ給て、うはのあま君そ、おゝしたて給ふ。源氏の君、さるゆへありて北山そうつの坊にわたり給ことありけり。此うは君も僧都にゆかりある人にて、つねはねん

すのために此山にかよひすみ侍けり。さることには、ひめ君をもあひくし奉り給ふ。けんしは、つれ／＼のあまりに、見なれたまはぬ山里すみのさま、いふせくもめつらかにもおはしけるか、かのもこのもたちより／＼して、のこるくまなくやすらひて御ともの(9ウ)人々に、かしこはこゝはたとつねしらせ給に、おなし柴かきの庵ながら、木たちよしありておかしくみゆるあり。これみつをめしてとはせ給へは、むかし、こあせちの大納言とかいひし人の北のかたは、此そうつのいもうとなめるか、京にもかつはすみながら後の世のたのもし所なれば、おり／＼はこゝにきかよひ給。又おさなういとうつくしき女君のましますは、兵部卿宮の御むすめ、あま君のまこ也と、かたり奉る。君、さらはなをよく見てむとて、さしのそき給へは、けになへての人とはみえ給はて、おひいてたま(10オ)はむ山くちはしるかりけりと、まつ御心の空めかしきそ、御くせなりとみゆ。そうつにもあま君にもほの／＼うちいて給ふ。

はつ草のわか葉のうへをみつるより旅ねの袖も露そかはかぬ、あまきみ、返事、

枕ふこよひはかりの露けさをみ山のこけにくらへさらなむ<sup>二</sup>君はひめきみの御事、いと／＼の給をきて、たち帰りなむとし給も、なこりすくなからぬ山さとなりなむかし。

夕まくれほのかに花の色を見てけさは(10ウ)かすみのたちそわつらふ、御むかへとて頭中将、さ中弁、さらぬ君達なとみちき給て、うちよりのおほせことなとさま／＼にていさはれかへらせ給ふ。又のあしたより御つかひひまなふ山ふかき御うしろめたさ、いひもやり給はず。かくて月ころふるまゝに、

うは君もかくれ給へは、京の上の<sup>と</sup>に御めのとの少なこんなど、ひとりふたりしておはしけるを、ちゝ宮の御かたみにうつろはし奉らんとすなるをいひつたへ侍りければ、とみの御ことに二条院へむかへとり奉りてかしたつき給。御こと、てならひなど、をしへ聞え給へは(11オ)ほと／＼しう御むすめのさましてそひ給ふ。

てにつみていつしかも見む紫のねにかよひける野へのわか草、と侍る比ほひよりそ、なま心つき給ふ御心ちはせし。後はあまたの御中にひとり御おほえはしるかりける。すまの御たかひめなどにも、此上の御ことのみそ、朝ゆふの御歎くさには、おほしけるとなり。御子などもおはしまさねは、いとわかう物し給しより、ほとけのみちにすゝませ給て、みつから千部の法花経かきたて給て、いかめしうくやうし給。此つかひ、左もすかた心のえんなるかたは(11ウ)世になきさまに聞え侍るを、我る山のと侍る言にいさゝかのふしをこめ侍る也。物をあはするならひ、吹毛のなむをもとむるなるへし。たとへまふとちのたはふれことにし侍れかし、つみにはのかれかたきかうへ、右は、いもせのなかにとりて、よとゝもに何のゆへかは侍らんなれば、かちにとおもひ給へらるゝはいかゝ。

四番

左 戀死君

右 莨上 勝

右の上、大きおとゝの御むすめ、宮はらにたゝ一所お(12オ)はしましてかしたかせ給へは、ひかる君、源氏の姓を給て○日と、みかとの御はからひにてむこにならせ給。うちたえあひす

み給て、いとよき御なからひなり。あにの頭中將、おなしさまにおひ出給て、紅葉賀の舞などにも左みきりにておはせしを、みる人はうらやみ奉て、おなし人と生るゝともみめ心の世にすくれてよしといはるゝためしは、昔のつみかろきにて、行すゑの佛の心にもちかゝるめるなど、この御ふたかたぞ、世中のかゝみにはいひもてはやしける。うへはいと御心をりかにおはしまして、なれば」(12ウ) ゆき給にしたかひても、人をはおそるしうはつかしきことにおもひかまへて、物など打いひ給にも、ふとさしたにもいらへず、おもてうちむかひては御かほのいとあかみ給までみえ侍るも、いとおかしき御心なりかし。源氏、わらはやみにつけて北山へおはしまして歸給にも、れるのはいかくれて、とみにも、えいてたまはぬを、おとゝ、せちにきこえ給へは、やゝしてわたり給へり。ゑにかきたる物のひめきみのやうに、しすへられて打みしろき給こともかたく、うるはしうて物し給へは、おもふこともうちかすめ、山里の物かたりをもきこえむ」(13オ) いふかひありておかしう打いらへ給はゝこそ哀ならめ、世には心もとけず、うとくはつかしき物におほして、年のかさなるにそへて御心へたてのまさるもくるしきに、時くはよのつねなる御けしきをも見はや、たへかたふわつらひ侍しをも、いかゝとたにとふらひたまはぬこそめつらしからぬことなれと、なをうらめしうときこえ給へは、やをら打そむきて、とはぬはつらき物にやあらんと、しりめに見おこせ給へるまみ、いとけたかうつくしけなり。さるに御子うみ給て、いくほとなう打なやみたまひかちなり。世のさはきとなりて祈」(13ウ) さまゝ侍れとも、をもき御物けにてつゐにかくれ給

ふ。かの宮す所より、人の世をあはれときくも露けきにをくるゝ袖を思ひこそやれ、御返し、源氏、

とまる身も消しもおなし露の世にこゝろをくらんほとそはかなき、わか宮を御かたみには見奉り給て、

霜かれのまかきにのこるなてしこをわかれし秋のかたみとそみる、御歎にしつませ給て、又、

なき玉そいとゝ悲しきねしとこのあくかれ」(14オ) かたき心ならひに、左、父おとゝなども此君をはあまたの中にとりわきて、かなしき物におもひかしつきけるに、ふとれるならすおはしましそめて、をもりそひ給へは、まとひてくわんたてなとせしかと、そのかひなし。いまはの時となりて、かゝる人をおもひそめて、ほとふるまゝにくつおれ侍るなど、かたりければ、おやなむつたへ侍ければ、おとこまとひてきたりけれど、うせはてぬ。えにしほとかなしみて、日かすをこもりけり。みな月の比なれば、夜ふけていとすゝしきに、ほたるのたかうとひかふを見て」(14ウ)

とふほたる雲のうへまでいぬへくは秋かせふくとかりにつけこせ、この段、ことに勝負わきかたし。むかしの哥合なとをみるに、あふ戀とあはさる戀はさしならへて、あふかたをちとすなるためしも侍にや、左、戀しに給へらん心さしのほと、あはれにも忝もおもふ給へ侍りながら、ふるきれるなきにしも侍らねは、右を勝とさため侍也。左のまうしう、猶はるけかたからんかしやと、なみたをささへかたきにこそ。

五番

左 夢語君「(15才)

右 臘月夜内侍督 勝

右の内侍は、春宮の御母弘徽殿の御いもうと、けふの花のえん見給はんとてまうのほり給。二月廿日はかりのことなれば、よひはほのくらしうおかしきに、こうきてんの三の戸わたりをたすみ給に、うちよりわかやかなる御聲の、いとなへてならぬして、おほろ月よにしく物はなしと、打すんしけるを、源氏さしよりてかひいたき、やをらかくれ給。女君はつふくと打さ、やき給へとかひなし。明行まゝに夢の心ちして、

うき身世にやかてきえなはたつねても草の「(15ウ)はらをとはしとそおもふ、かくてしのひくにかよひ給ふ。この君は春宮へまいり給へきなるを、かゝる疵さへいてき給へは、御まま母の后宮もいきとほり浅からて、こ院かくれさせ給て後は、春宮にもことのよし申させ給て、源氏をすまへうつろはしたてまつり給ふ。かのうらへも、

涙河みなはもうきて消ぬへしなかれて後の世をもまたすて又御めのとの中将のかたへとて、すまより、

こりすまのうらのみるめも床しきにしほやくあまよいか、おもはむ、左、夢語のきみ、はしめは「(16才)たゝ人のつまにて侍しやらん、後はやむことなきかたにおもはれ給て、子なとも侍しにや、これもはかなきことほりにまかせてたえはてぬ。此中将の君をいかでと思しかと、さなむいはんもすへなきにや、まことならぬ夢かたりす。源氏、紫の上の御ことを僧都にうちいて給しにも、このことは、みゆ。中将は、おもひおもはぬ心なければ、きてねにけり。又いかなるおりにか、

百年に一とせたらぬつくもかみわれやこふらしおもかけにみゆ、右は、花のえんにあひ初し内侍の、けふにめくらひ侍るは、いとめつらかなる興なるへし「(16ウ)左はいさゝかきたすきたるかたに見なれ侍れば、すひおうのかうへの霜に似たるをにくむとかや侍れば、ふるきこと葉になすらへて、かたふき侍にこそ、右をかちとする。

六番

左 小野小町 勝

右 女三宮

右は、朱雀院御心なやみ日にそへておもり給へは、御世を春宮にゆつり給。女宮ふた所おはしましけるを、御いとをしみなめならず、いかさまにかなりてもはて「(17才)給はんとすらんなど、うち歎かせ給て、二宮をは柏木右衛門督、三宮をは六条院、御うしろみうけ給り給ふ。三宮は、ことに御かたちも世になうえんなるかたにおはしませは、御佛の御さうさまなとやうやうきこえあるさまなるへくとも、この御すかたにてや、をしはかれ侍らんむ。けに青柳も朝露にうちなひく影は、いかなる花にかは、けおされ侍るへき。めのまへに、さとうちおほふ心ちせらるゝ、院もいとかしこう思かはし給けるに、かしは木の右衛門督、物のたよりにふと見初奉て、しつ心なう思わたりければ、御めのとのしゝうにかたらひて「(17ウ)おりくくの御ふみなとかよひけるにや。此比は紫上なやみ給て、院もひたすらこなたにおはしまして、すこし御心きよけなれば、宮の御かたにわたらせ給。おもひかけす入き給めれば、とりみたる物ともこしらへあへず、督のふみなと、しとねのしたにかいくるみ



てをけるを、院見つけ給に、きたくことあらはれてかける  
文なりけり。とりてかへらせ給のちは、まことの御心さしもえ  
おしますす、御子をさへうみ給へは、御身にもくやしきことの  
御歎のみなるにそ。御うふやなどには、わか御子のことくたひ  
くおはしまして、いかの御ゆはひ」(18才)に若君をいたき  
奉りて、宮の御みゝにあてゝ、

たか世にかたねをまきしと人とは、いか、岩ねの松はこた  
へん、宮は、かひふしてきえいり給。督にもかゝること、けし  
きはみ給へは、物やみになりてつゐにうせ給ぬ。いまはの時に  
しゝうにつかはしける、

いまはとてえんけふりもむすほ、れたえぬおもひのなを  
やのこさむ、宮、御らんして、

たちそひてきえやしなましうき事をおもひこかるゝけふり  
くらへに、宮は、ちゝの御門にも御いとま申させ給はて、御く  
しおろして、入道の宮と申しき」(18ウ)左は、色好の家なる  
へし。さるへくは、なからひのかたにとりては、右に申くらふ  
へきかたも侍らす。すかた、心の世にすくれ、やまと哥の道に  
さへなへての聞えにも侍らす。ちはやふる神代にはしまるわ  
さなるを、ふるき物のことには、いにしへのことをも哥の心を  
もしれる人、わつかに独ふたりといひて、すなはち小町をくわ  
へたり。人のくにゝも女はみめ心につけて、かしこきかたの聞  
えは侍めるは、はまのま砂のことくなれと、道にとりては、あ  
るは絵あるはもしなどには見え侍れと、からの哥などにもその  
名にたかき」(19才)はまれなるやらん。むかしは、いさなみ  
のみこと、あなにかやとなかめ、下てる姫の、あもなるやをと

たなはたのとよみ、近き世には、そとをり姫の、くものふるま  
ひといひ、うねめか、あさか山と侍しは、あさからぬ心にもそ  
侍るらむ。又、こゝらのせんしうなどにみえ侍る女の名は、あ  
けてかそふへからす。彼古今集は貫之御ゆるされにあつからす  
は、はたあるへからす。ひとり古今のあいたにあゆむなど、ぬ  
しなき詞にしも侍らねと、女のうへにひきとりては、こまちに  
やゆつり聞えたまひつらんかし」(19ウ)

七番

左 前斎宮女御

右 權斎院 勝

右、あさかほはかものいつきにゐ給しより、源氏、神のいかき  
のうちまての給わたり侍しかとも、つれなくすくし給。父宮か  
くれさせ給に、とふらひなと申給とて、

人しれす神のゆるしを待しまにこゝら常なき世をすくすか  
な、御返し、

なへて世のあはれはかりをとふからにちかひしことは神や  
いさめむみよ又源氏」(20才)

みしおりの露わすられぬ朝かほのはなのさかりは過やしぬ  
らん、かくはの給ひつくし給へとも、つれなきかきりには此君  
を申侍るやらん。ちゝの御あと桃そのゝ宮ゆつりえさせ給て、  
おこなひすみ給とそ。左は、かの中將、うちの御つかひにて伊  
勢にくたり給。后宮の御かたより、つねのつかひよりはよくい  
たはれなと侍しかは、ねや遠くさしもえはなたさめれは、ねひ  
とつはかりに女きたりて、うしみつまでかたらふ。さて明はてゝ  
女のもとより」(20ウ)

君やこし我や行けむおもほえずゆめかうつゝかねてかきめ  
てか<sup>(二)</sup>返し中將、

かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはよ人さため  
よ、神〇いさむる道ならずとか侍るなれば、さしも思給へらぬ  
を、かのたかはし氏に玉て、いまにみ前をゆるさるゝことなき  
など申侍なれば、右は、おりる給てたに、神やいさめんと猶  
あかめきこえ給ふるに、左は、まさしきいかきのうちなれば、  
そのをそれなきにしも侍らしと、わつかかにをしはかられ侍るは  
いかゝ。おほつかなしや」(21才)

八番

左 伊勢 持

右 明石上

左は、七条の太后宮につねは侍しにや、寛平の御門おりく御  
覽しけるか、王子一所うみ奉りけり。やまと哥の道におさく聞  
え侍るとなり。このみちは秋つ嶋のみのりなるかゆへに、その  
人のめいほくならずといふことなし。伊せ物かたりといへる事  
は、かの女のかきえらひて、宇多のみかたとに奉けるよし、題号  
につけてつたふる人も侍るとかや。猶はなはたしき」(21ウ)  
ほまれなるへし。右は、ちゝはりまのかみ、すみはてゝも猶い  
かなる心かまへにや、此うらをさりやらす、後の世のみちふか  
うつとめすみけるに、むすめ一所も給へり。いといたうかしつ  
きければ、京にも聞つたふる人は、いかにしてか此人をえめと、  
戀しのふかたこゝら侍るめれと、われこそかゝる海つらにしつ  
みもはてめ、なへてのむすをはとらし、さるへくは、なかく  
うみに入てよなど、こしらへをきけるに、源氏の君、すまにう

つろはせ給を聞傳て、いかなるたよりにつけてか、此うらにひ  
きわたし奉らんとおもふに、此ほとのかかしほに」(22才)御  
たひ所のさまをしはかれ侍れば、ちいさやかなるふねして御  
むかひにまいる。源氏もさる夢のさとしもおはせしにや、うつゝ  
にあはせ給て、うらつたひし給。入道は所につけたる御すみか  
のさま、心のかきりきよらをつくして入奉る。あちきなき御つれ  
くゝに、御ことの音にたてそへ給そ、いと物はかなしかりける。  
ある時入道まいりて、ひはのてひとつふたつ、いとおかしうひ  
きて、御ことなとすゝめ奉て、かゝる物の音は女のひきたるこ  
そ心はすみ侍れなど、やうくむすめのこと、ほのめかしきこ  
えける」(22ウ)そ、いとかたはらいたき。やかてむすめのも  
とに御文あり。

をちこちもしらぬ雲井をなかめわひかすめるやとの木すへ  
をそみる<sup>とふ</sup>、うちつけなればにや、御返事申さゝめれば、入道か  
はりて、

なかむらんおなし雲るをなかむればおもひもおなしおもひ  
なるらん、又源氏、

いふせくも心に物をなやむかなやよいかにと問人もなみ  
このたひはと、むすめの御返事、

おもふらん心のほとよやよいかにまたみぬ人をきゝかなや  
まむ、むすめをは、たかしほのおそれに」(23才)さしはなち  
て、をかへの宿にすませしにや、源氏おはしまして、ことなと  
ひきあそひ給にも、物ことに都の御かたくゝにも、けおさるへ  
うも侍らすもてはやされ給。又のとしの八月には、めしかへさ  
れ給。女君たゝならずおはしけるを御覽しをき給けるそ、御心

くるしき。かたみにひき給へとして、御ことなどのこし給へは、  
なをさらに頼めをきける一ことをつきせぬ音にやかけてし  
のはむ、あかしには、女君うみ奉り給へは、御めのとなとくた  
し給て、はこくませ給（23ウ）後は都にうつし奉て、御むす  
めの君は紫上○やしなひにて春宮へまいり、くにの御はゝとな  
らせ給。めてたき御すくせ成けり。此番、いつくをしゆうとも  
おもひわかれ侍らす。右は、おほろけならぬかたにいひとられ、  
御子のすゑまでさかへのほり給御とくにまかせ、左は、さえの  
いとあさからす世に名のたかきかたにひかれ侍れは、なすらへ  
て持なともや侍るへき。

九番

左 有常娘姉君 勝

右 空蟬君（24オ）

左の君は、物語のうへにも、いつれやらんとおもひたとられ侍  
りぬ。初の段にほのくみえ侍て、すゑに女はらからふたり有  
けり。独はいやしきおとこのまつしき、ひとりあてなるおと  
こもたるなど侍り。いやしきおとこもたる、しはずのつこもり  
にうへのきぬをあらひてと侍めるは、ふるきことには、こゝに  
わかわたくしをあらひ、こゝにわか衣をあらふといへる古語の  
心なともや。此段の心さしあさはかにやは見侍らん。女は、  
わかせをおもふを、かしこきにはすなれば、時にしたかへる心  
むかしのことにはもかよひ侍るにこそ。ろうさうのきぬ（24ウ）  
は六位のなとにや。されはいやしきとはいふなるここそにや。  
紫のいろこき時はめはるに野なる草木そわかれさりける、  
右、うつせみは、中河のわたりにすみけるか、たひくの御か

たたかへも下の心なきにしも侍らす。やり水などのすゝしきに  
ことよせ給ふにや、かのご君そ道しはし奉る。ある時おはしけ  
るに、女のねやもいとちかうやとし奉りければ、さしのそき給ふ  
に、まゝむすめと、こうちけるに、はてぬれば、とをみそなと  
いひて手をおりければ、あるしの女、いよのゆけたもよみつゝ  
してんやとて、わらひしなり。いつととも女はいとおほと（25オ）かに、  
空おそろしきことをおもひ、とををひとつそ  
こたへまほしう思給へられ侍る。此物かたりやらん、あふみの  
君とかいひし人の、すくろくう給へしに、まけめなともや  
侍けん、さいとりあけて、かろらかにをしもみて、おもてうち  
さゝけ、せうさいくと、したとにことはやうこひけるを、ち  
のおとと、物こしに見給て、こゝちはつかしう、あなうたてく  
とつまはしきして、にけ給ひしと侍るもことほりならずや。さ  
て其夜は、うつせみのもぬけとかやなり侍しを、むすめのみね  
のこりけるに、心ならずあひみ給。けんし（25ウ）  
ほのかにも軒はの萩をむすはすは露のかことをなにゝかけ  
まし、むすめ、

ほのめかす風につけてもした萩のなかはゝ露にむすほゝれ  
つゝ、ぬきすへしけるきぬをとりかへらせ給て、朝にかへすとて、  
うつせみの身をかへてける木のもとになを人からのなつか  
しきかな（天衣）御返事、

うつせみのはにをく露のこかくれてしのひくゝにぬるゝ袖  
かな、伊予のすけうせて後は、めし入給て、あまたのかすにさ  
ふらはせ給とかや、右も心（26オ）あたゝしきかたにはき  
こえ侍なる物から、人からも伊予のすけなとにむすほふるへき

ならぬを、おやなどもなう、たよりをうしなひて、かゝるかたにむれぬたるなるへし。なみくの人にしもおはさゝめれば、おもはずにたちよりの給は、あなたも聲たてかたなるへし。左は、たとしへなう、かしこきかたに聞なされて侍れば、かちの字をくわへ侍るにこそ。

十番

左 中納言娘君

右 夕見上 勝〔26ウ〕

右は、頭中将、雨夜の物かたりに、さる女にあさからすかよひて、子をさへうみ侍れば、になうおもひかはし侍しを、家のめなむ、くつききことをいふと聞て心とはひかくれて、いつちぬらんと〇しらす侍るなり。その子の名をは、なてしこといひしなど、かたる。その人にや、まかりいてなむとて、かゝることをかきてをきけるとかや、

山かつのかきほあるともおりくはあはれをかけよなてしこの露、うせ給ひせんほうのみやすん所、六條わたりにおはしましけるに、けんし〔27オ〕しのひくにかよひ給。第二の御めの第二アリの給はんとておはしけるに、下の心なきにしもおはしませす。かへらせ給道のほとに、きりかけたつこ家にしろき花のさきかゝりけるを、御ともの人めして、折て奉れとの給ひしかは、これみつ、なにその花そと申侍れば、うちより、これなむ夕かほといへり。えたも、いとなきけなめるに、これにすへて奉れとて、あふきをさしいて侍けるを、とりて見給へは、

心あてにそれかとそみる白露のひかりそへたる〔27ウ〕

ゆふかほの花 御返し、

よりてこそそれかともみめたそかれにほのくみえし花の夕かほ、御車とめて、あるしの名をとせ給へは、これみつ、陽明介か家に侍る也。あかたにまかりてなと申ければ、こよひはとまり給。八月十五夜のことなるへし。となりの家からうすなといへる物の聲、みたけしやうしんのをとして、なも當來導師とおかむなるも、御みゝいとかしかまし。こゝは物むつかしきとて、ひとつ車にてなにかしの院へいさなひ給に、わかまたしらぬなとの給し御返しに〔28オ〕

山のはの心もしらてゆく月はうはの空にてかけやきえなな、此所はあれはて、けに松桂にふくろうなき、らんきくにきつねすむさま也。夜ふけはてて、こたまとかいふものゝきたりて、女君をとり奉る。源氏はあきれまどひて、たちをひきぬき、もとめ給へとも、めにもみえず。火もくらうなりて、物のあしをとのみせし也。これみつとめしければ、又そらにていふなりけり。又ひかゝけてみ給へは、からのみなりけるぞ、いとせんかたもなき。此所は、むかし、宇田のみかと、みやす所などひき給てあそひ給〔28ウ〕けるにも、さる物の〇けるなど、後にそ、くひかなしみ給ふ。ひかし山六道のまへまで、ひとつ車にてをくり奉り給。けふりとなし侍そ、夢の心ちし給。とのにかへりおはしまして、

みし人のけふりを雲となかむればゆふへのそらもなつかしきかな、かめのとに右近といひしを、御かたみにとめしをかせ給ふ。左の君、むかし氏のなかに御子むまれ給ふ。御おほちかたにて、中将、

我門にちひろあるかけをうへつれば夏冬たれかかくれさるへき、ありはらは、わうしをいて、(29才) いくはくの世をもへさるに、かくまておとろへはて給ことを敷きくらし給。あにおと、ひきみて布引のたき見にまかりて、衛ふのかみ、わか世をはけふかあすかと待かひのなみたのたきといつれたかけむ、又あるし、

ぬきみたる人こそあるらししら玉のまなくもちるか袖のせはきに、かうまてうちなけかる、世の、おもはずも御子むまれ給へれば、けにたのもしき御おひさきなるへし。此さ右、又いかにそや。右の上は、心いと花やかにえんなるかたの、又なうきこ(29ウ) え、左は、なたかう時にあへるさまのみえ給ふるを、これはさたかすのみこなり。時の人、中將のことなむいひけると、おもてにあらはれ侍れば、ふるき人のふてのあと、けちかたきわさに侍めれば、をのつから右を勝にと申侍るならし。十一番

左 染殿内侍

右 蓬生君 持

右は、父宮の御ゆつりをたかへす、此宮にすませ給。源氏、なつかしきことにおほして、いひよらせ給。御心(30才) いうこきなう、しちようなるかたにおはしまして、御かたちなともなみくの人にいはれ<sup>侍ら</sup>ぬ物から、いさゝかをくれ給かたもくは、りおはせしやらん、すまの御旅るなどにも、人〇の御かずにもとりわきたるかたには思ひもよへられ侍らさめれば、御心と身をおとしめ給て、とふらひ給こと、おさく、まれなるにや。かへりてもかたみにふともえ音つれかはし給はず。

宮はよもきむくらのあらそへるまゝに、ろうなとも雨露にもりくちて、のこれるかたにしたかひて、かたくよりすみ給ふさまなり。ちの御たからなとは、山ことならず(30ウ) つみかさね侍しも、みなくちうせて、その物とさへ見わかれ侍らぬほとにや。つかうまつりし人もかつくこほれちりて、したしきかきり、ひとりふたりそ、とまりける。しうの君とて御めのとやうにて侍しも、つくしの大貳になりてくたりし人いさなはれければ、君、

たゆましきすちを<sup>とた</sup>たね<sup>のみ</sup>し玉かつらおもひのほかにかけはなれぬる、侍従、御返し、

玉かつらかけてはやまし行みちのたむけの神もかけてちかはん、又のとし、源氏、物のよすかに(31才) おほしいておはしければ、よもきかそまのいふせきに、道さへたとられ侍ければ、源氏、

尋てもわれこそとはめみちもなくふかきよもきかもとの心を、かくてすみ給御さま見たてまつり給て、此ほとのと絶さへうらめしうおほして、みさうより人めして、有へきかきりとりつくろひて、めのまへのむかしとなし給。あまたの人なとよひとりて、かみなかしもさふらはせ給。のちには六條院へうつし奉りて、とりわきてあつかひきこえ給とそ。<sup>(二才)</sup>左は、やむことなきかたに(31ウ) きこえ侍しに、中將、あさからすまかりかよひけるか、子ある中なりけれと、世のならひかれくさまになり侍て、又人のかよふと聞えければ、

秋の夜ははる日わする、物なれやかすみにきりやちへまさるらん、女、かへし、

千の秋一つの春にむかはめやもみちも花もともにこそちれ、此つかひ、いつれをそれと申定侍らん。右、よもきふのやとりたへすみ給へらん心さし、哀にもかしこうもおもふ給へ侍るを、左も、きはくしうえんなるかたはをくれてもみえ— (32才) 侍らぬうへ、こゝをとなむすへきふしも侍らねは、持などにてもや侍るへき。

十二番

左 初艸君

右 玉鬘内侍 持

左、いもうとのおかしけなるを見て、

うらわかみねよけにみゆるわか草を人のむすはむことをしそ思ふ、女、返し、

はつくさのなとめつらしきことのはそうらなく物をおもひけるかな、此言にとりて、女を— (32ウ) けさうしたるかたにいひな<sup>らす</sup>ふるかたも侍るやらん、はらからのなからひも、そのれぬすくならず侍るめれば、さにや侍らんなれと、ふかういもうとをあはれふさまにも見え侍らすや。又、末の段にふち原のとしゆきといふ人よはひけり。またわかければ、ふみもおさくしからず、ことはもいひしらす、いはんや哥はよまさりければ、あるしの人、あんをかきて侍り。

つれくのなかめにまさるなみた河そてのみひちてあふよしもなし、かへし、おとこ、女にかはりて— (33才)

あさみこそ袖はひつらめなみたかは身さへなかるるときかしたのまむ<sup>二文字も</sup>右のなひしは、いはけなきほとに、めのとにくして、はるかなるせかひに行かくれ給。やうくにおとなひ給まゝに、

此君をえまほしういひわたる人もおほかりけれと、かゝるあさましきかたには、むもれしつみもはてさせ給はし。いかにもして都にいさなひ奉て、ちゝおとゝにもまかせ奉らんなど、いひくせしほとに、めのと、いたつらになりぬ。その子なむ、ほいたかはすひき奉りてのほる。ひゝきのなたをすくとて— (33ウ) うきことのむねのみさはきひゝきにはひゝきのなたもさはらさりけり、都にも、それさ<sup>マ</sup>ともとめよるへき人もしらせ給はねは、まつはつせ<sup>に</sup>、まうて給て<sup>右近</sup>あひ奉りて、みちしはして、源氏の御やしなひにてうつりておはしましぬ。さてうこん、

ふたもとの杉のたちとをたつねすはふるかはのへに君を見ましや、こと、ひはなと、源氏、ひたすらにをしへきこえ給。かの君のあにの中将などにも、よきむすめたつねえたりとほのめかし給へは、いつくならんと床しう思て— (34才)

おもふとも君はしらしなわきかへり岩もる水の色しみえねは、なとよみ侍けるに、のちにそかたり給て、わらはせ給ける。さて源しも、おりくはけしきはみ給ことも侍れとも、しらすかほにもてなひすくし給へは、

おもひかねむかしのあとをたつぬれはおやにそむけるこそたくひなき、女、かへし、

ふるきあとたつぬれとけになかりけりこの世にかゝるおやのこゝろは、かく侍れと、つれなくてははて給はしと、さすかにをしはかり— (34ウ) 侍りぬ。しらすかし、ひけくろの大將の北のかたになりて、あまたの御子うみ給て、いとかぎりなき御さかへなり。此番、又、左は、たとへけさうのかたにいひとらるとも、まさしきこのかみにつけては、なひくけはひの侍ら

さめるも、そのことはりなきにし侍らす。右は、又、まことの御むすめにもあらざめれば、うけひきさふらひ給はんも、つみなるまてはあらしかなれば、なすらへてよき持にこそ侍らめ」

(35才)

左方

五条大后宮

忠仁公良房女

二条大皇大后宮

贈大政大臣長良卿女母總繼女

有常女君

母良門女

戀死君

三条右大臣良相卿女

夢語君

右兵衛督紀名虎女

小野小町

出羽郡司小野常削

齋宮女御

文德天皇御女

伊勢

伊勢守繼蔭

有常女姉君」(35ウ)

染殿内侍

良相女

初草君

阿保親王女 平城天皇御孫

右方

桐壺更衣

大納言女

薄雲女院

先帝御女

紫上

兵部卿宮女

葵上

引入大臣女

臈月夜内侍督

弘徽殿御妹」(36才)

女三宮

朱雀院御女

權齋院

式部卿宮女

明石上

前播守女

空蟬君

大納言女

夕兒上

母三位中将女

蓬生君

常陸宮女

玉鬘内侍

致仕大政大臣女」(36ウ)

(付記)

前掲の拙稿で、『伊勢源氏十二番女合』の成立については大勢にしたがい、不用意に「鎌倉時代の成立と考えられている」と述べたが、尾田敬子氏「『伊勢源氏十二番女合』の成立基盤」(『國語国文』一九八五年十一月)に学びつつ、現在では、室町後期、十五・六世紀の成立と考えている。成立や諸伝本間の関係等は、別稿を準備中である。

(なかしま しょうじ)